

機関番号：40124

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2007～2009

課題番号：19730395

研究課題名(和文) コンパニオンアニマルに対する愛着とその影響の汎文化性と特殊性に関する国際比較研究

研究課題名(英文) Universality and culture-specificity of attachment to companion animals and its effects: Cross-national studies

研究代表者

金児 恵 (KANEKO MEGUMI)

北海道武蔵女子短期大学・教養学科・専任講師

研究者番号：30422348

研究成果の概要(和文)：これまで、日本人飼主がコンパニオンアニマル(ペット)に対する依存的愛着を持つことが明らかにされてきた。本研究では、これが日本社会における文化特異的な現象なのか、それとも、実は欧米にも存在する汎文化的な現象なのかを明らかにするために、2つの日米比較調査を行った。その結果、強度は弱かったものの、アメリカ人飼主においても、日本人と類似した依存的なペットとの愛着関係が存在し、それが低い主観的幸福感と関連していることが示された。

研究成果の概要(英文)：Previous research has shown that Japanese pet owners tend to have “dependent attachment.” which is characterized by obsession to pets. In this study, I conducted two cross-national surveys in order to investigate whether the dependent attachment was a culturally-specific phenomenon that was unique to Japanese society, or a universal phenomenon that was also present among Western owners. The results showed that, although the magnitude was weaker than that of Japanese owners, dependent attachment did exist among American owners, and that it was associated with lower subjective well-being.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	0	1,300,000
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,800,000	450,000	3,250,000

研究分野：社会心理学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：コンパニオンアニマル(ペット)、愛着、比較文化、人と動物の関係、動物観

1. 研究開始当初の背景

動物をコンパニオンアニマル(Companion animal; 以下「ペット」)として家庭内で飼う伝統の長い欧米では、膨大な実証研究を通

じて、ペットが人の身体的・精神的健康を向上させる心理的効果や、飼主の対人的交流を広げる対人ネットワーク効果を持つことが明らかにされてきた(例えば Wilson &

Turner, 1998)。

一方、日本においては、日本人飼主が持つペットへの愛着は、欧米の先行研究との知見とは異なり、精神的健康を必ずしも増進させないばかりか、むしろ低下させる場合もあることが示されてきた(金児・菅原・張, 2006; 金児, 2006)。この原因について検討した後続の研究では、1) 一口に「愛着」と言っても、その内容には基本的愛着(ペットから心理的な安らぎを得ると同時に、飼育に対する責任を持つ関係)と依存的愛着(ペットへの密着度が高く、過度に情緒的絆や安定をもとめる関係)の独立した要素があること、2) 依存的愛着は、特に非飼主との社会的葛藤につながりやすい嫉の欠如やマナーの悪さと関連があること、などが見いだされた(例えば金児・金, 2004)。

しかしここには未解決の問題がある。それは、ペットに対するこうした心理的拘泥が、果たして日本社会に独特な文化特殊現象なのか、それとも実は欧米諸国にも存在しているにもかかわらず従来の研究では見過ごされてきた普遍的な現象なのか、である。

2. 研究の目的

そこで本研究では、ペットへの依存的愛着が欧米にも一般的に存在するのか、存在するとすればそれは日本人飼主の場合と同様に精神的健康に負の影響を及ぼすのかを検討することを目的とし、2つの社会調査研究を行った。その際、ペットと同様にときに世話と嫉を必要とする子育てと、ペットに対する関係との関連についても検討した。研究1は全米の一般市民を対象とした予備的調査であり、質的方法と量的方法を組み合わせることにより、アメリカ人飼主とペットの関係の性質を明らかにすることを試みた。研究2は、日米の都市および非都市部に居住する飼主を対象とした量的な国際比較調査であり、研究1で示唆された米国の依存的愛着の性質とその帰結を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 研究1

アメリカ合衆国在住の30~60歳の白人男女104名を対象にインターネットを通じた調査を行った。対象者は、米国の調査会社が持つ全国から無作為抽出された回答者プールから、犬/猫の飼主が抽出された。平均年齢は47.4歳、性別の内訳は男性47人、女性58人であった。

【質問項目】①ペットへの愛着：金児・金(2004)で抽出された依存的愛着4項目：A) 行動的側面として「ペットの写真を持ち歩く」「ペットに服やアクセサリを付ける」、B) 心理的な絆として「ペットがいないと寂

しくてたまらない」「家族の誰に対してよりも、ペットに親しみを感じる」(いずれも賛成度を4件法で評定)、②ペットはどのような存在か：「子ども」「友達」などを列挙したリストからの選択形式、③ペットと飼主の関係と親子関係の類似性認知：両者が「似ている」/「異なる」の2択。加えて、そう考える理由についての自由記述。④ペットの嫉：「ペットが悪いことをした時には必ず叱るか」(はい/いいえ)、「ペットを幸せにするのはどちらか」(厳しくしつけをする/したいようにさせてやる)、および、そう考える理由についての自由記述。

(2) 研究2

アメリカ合衆国在住の18歳以上の白人男女412名、および日本在住の30歳以上の男女500人に対してインターネットを通じた調査を行った。米国の対象者は、研究1と同様、米国の調査会社が持つ全国から無作為抽出された回答者プールから犬の飼主が抽出された。日本の対象者は、日本のネットリサーチ会社が持つ大規模モニターの中から犬の飼主が抽出された。

【質問項目】①ペットへの依存的愛着、②文化的自己観(相互協調的自己観)、③人間に関する子育て観(「子供が小さいうちは厳しく嫉けるべきである」「子供が小さいうちは、したいようにさせてやるのが望ましい」、④主観的幸福感(生活満足度)、等

4. 研究成果

(1) 研究1

以下の分析結果は、本調査で得られた結果を、研究代表者が2003年および2005年に日本の首都圏で実施した調査結果(金児・金, 2004と金児・菅原・張, 2006参照)と比較したものである。

①ペットへの依存的愛着

先行研究で「依存的愛着」に分類された関係性が米国でも同様に見られるのかを検討した。図1は日米それぞれの単純集計およびt検定結果である。いずれの項目についても、日本人飼主の方が米国人飼主よりも依存的愛着が強いとの結果が得られた。ただし、米国人飼主を居住地(都市部/非都市部)で分割して検討したところ、「ペットがいないと寂しい」と「家族よりペットに親しみ」の2項目で都市部の飼主の方が愛着度が高かった(双方とも $p < .05$)。特に「家族よりペットに親しみ」については米国都市部と日本との間に有意差は見られず、居住環境によっては米国でも日本のような依存的愛着が存在する可能性が示唆された。

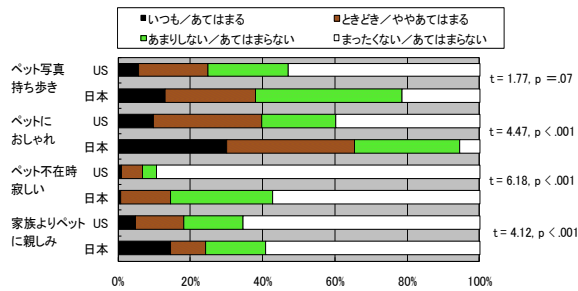


図1 日米のペットへの依存的愛着

②ペットはどのような存在か

「あなたにとってペットはどのような存在か」との問いに対し、米国では「単なるペット」と回答した人の割合が最も多く(28.8%)、ついで「友達」(24.0%)、「親友」(22.1%)、「子ども」(20.2%)の順に多かった(図2)。一方、日本では「子ども」とみなしている飼主が最も多く(40.9%)、ついで「単なるペット」(18.9%)、「人生のパートナー」(12.6%)、「孫」(6.3%)、「友達」(4.7%)の順であった(図3)。

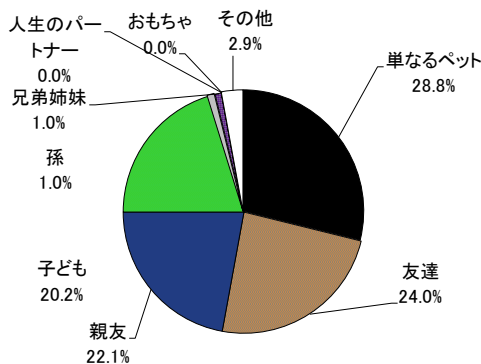


図2 ペットの存在(米国)

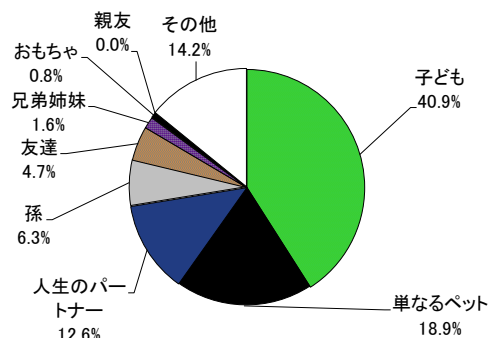


図3 ペットの存在(日本)

③ペット-飼主関係と親子関係の類似性認知
 ペットと飼主の関係と親子関係の類似性を尋ねたところ、類似していると考える米国人飼主が51.5%に上った。その理由について自由回答を求めたところ、「ペットは、子どもと同じように世話や愛情を必要とするから」、「ペットは私に頼っているから」といった意見が多くみられた。すなわち、ペットが

自分を必要としていること(=ペットにサポートを与えること)をもって子どもと同じだと捉えている。これは、日本では「ペットは無条件の愛情をくれるから」とペットからサポートを受ける側面を重視する飼主が多いことは対照的であった。一方、「親子関係とは異なる」と回答した飼主の多くは、その理由を「子どもは人間であり、ペットは動物だから」と述べ、人間と動物を峻別していた。

④ペットの躰

「ペットが悪いことをしたら必ず叱るか」との質問には、米国人よりもむしろ日本人の方が「叱る」と回答する人が多く見られた(図4)。ただし、自由回答を見ると、「叱らない」と回答した米国人飼主の中には「(よく訓練されているので)悪いことはしない」といった記述が複数見られた。

他方、「ペットに厳しくしつけをすること、ペットのしたいようにさせてやること」のどちらがペットをより幸せにするかとの問いに対しては、「躰をする方が幸せ」と回答した米国人が73.8%、「したいようにさせてやる方が幸せ」と回答した人が26.2%であった(図5)。これは、金児(2003)日本の調査において、「ペットには、したいようにさせてやりたい」との質問項目に対して「あてはまる／ややあてはまる」と回答した飼主が58.8%いたことと対照的であった。なお、「ペットは厳しく躰ける方が幸せだ」と考える理由については、「人間と同じように、ペットにも“して良い事と悪いことの境界や限界”があり、それを教えるべきだから」との回答が多くみられた。

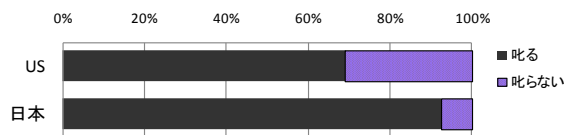


図4 悪いことをした時必ず叱るか

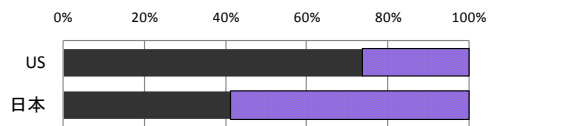


図5 ペットにとってどちらが幸せか

(2) 研究2

研究1の結果を踏まえ、日本とアメリカで量的調査を行った。

①□ペットへの愛着の文化差の検討

因子分析の結果、日米で同じ因子構造が示され、2因子(基本的愛着、依存的愛着)が抽出された(表1, 表2)。それぞれの因子に分類された項目得点の平均をとり、尺度化した。

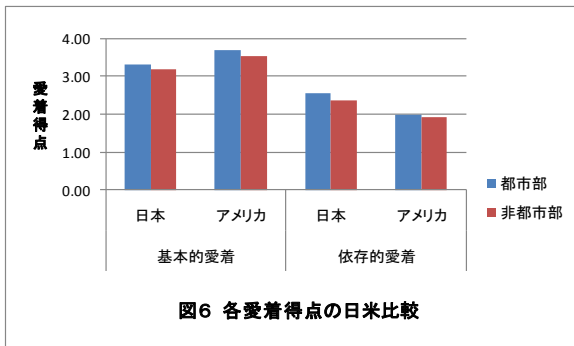
表1 ペットへの愛着の因子分析結果(日本)

	因子負荷量		
	I	II	共通性
第I因子: 基本的愛着			
なるべく、犬の面倒はみたくない(反転)	.856	-.056	.736
私の犬は私を幸せな気分してくれる	.707	.488	.739
私の犬と一緒にいると、ほっとする	.691	.520	.748
第II因子: 依存的愛着			
私の犬にいつも、重要な話をしたり、心のうちを打ち明けたりする	.032	.836	.700
家族の誰に対してよりも、私の犬に親しみを感じる	.157	.791	.651
外出していても、いつも犬のことが気になって早く帰る	.311	.688	.570
犬がいないと寂しくてたまらない	.551	.678	.763
負荷量平方和	2.14	2.77	
寄与率(%)	39.58	30.52	

表2 ペットへの愛着の因子分析結果(米国)

	因子負荷量		
	I	II	共通性
第I因子: 基本的愛着			
私の犬は私を幸せな気分してくれる	.796	.253	.697
私の犬と一緒にいると、ほっとする	.736	.328	.649
なるべく、犬の面倒はみたくない(反転)	.723	-.064	.526
第II因子: 依存的愛着			
私の犬にいつも、重要な話をしたり、心のうちを打ち明けたりする	.092	.806	.658
犬がいないと寂しくてたまらない	.101	.803	.655
外出していても、いつも犬のことが気になって早く帰る	.180	.705	.529
家族の誰に対してよりも、私の犬に親しみを感じる	.147	.700	.512
負荷量平方和	1.77	2.46	
寄与率(%)	25.27	35.09	

次に、基本的愛着と依存的愛着の程度が日米間で異なるか検討した。その結果、基本的愛着は日本よりアメリカで高かったが、依存的愛着はアメリカより日本で高いことが示された。また、日本とアメリカいずれにおいても、都市部の方が非都市部よりも、基本的愛着と依存的愛着の双方が高いとの結果が得られた(図6)。



②依存的愛着を規定する要因

日本人飼主の方がアメリカ人飼主よりも依存的愛着が強いという文化差がなぜみられるのかを、国と子育て観と依存的愛着の関連を調べるパス解析により検討した。仮説では、日本人飼主の依存的愛着が強いのは、ア

メリカ人飼主と比べ、①相互協調的自己観、および②放任的子育て観、がより強いためだろうと予測した。

まず依存的愛着を従属変数、国を独立変数とし、性別、年齢、健康状態を統制した重回帰分析を行った。その結果、図6で示した結果と同様、日本の方が依存的愛着が高いことが示された。

次に、この効果が協調的自己観あるいは子育て観によって媒介されているかを検討した。上記の重回帰分析に独立変数として新たに相互協調的自己観または子育て観を追加投入したところ、子育て観にのみ、有意な媒介効果が見られた。すなわち、日本人ほど「子供が小さいうちは、したいようにさせてやるのが望ましい」といった放任的子育て観が強く、それが強い依存的愛着につながっていることが明らかになった(図7)。

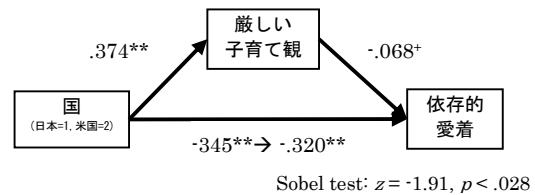


図7 国が依存的愛着に影響を及ぼすプロセス

③依存的愛着の影響

日本人飼主を対象とした先行研究では、依存的愛着が強いほど主観的幸福感が低いとの結果が得られてきた(金児, 2006)。こうした関連がアメリカ人飼主にもみられるかどうかを検討するために、生活満足度を従属変数、基本的愛着および依存的愛着を独立変数とし、性別、年齢、健康状態、都市/非都市を統制した重回帰分析を行った。その結果、日本人飼主については、基本的愛着が高いほど主観的幸福感が高いとの結果が得られた一方で、依存的愛着と主観的幸福感との間に関連はないという先行研究とは異なる結果が得られた。他方、アメリカの飼主については、基本的愛着と主観的幸福感の間に関連はなかったが、依存的愛着が高いほど主観的幸福感が低いことが示された(図7)。

表3 生活満足度を従属変数とした重回帰分析の結果

	日本	アメリカ
	β	β
基本的愛着	.159 **	.030
依存的愛着	.090	-.107 *
性別(男性=1, 女性=2)	.030	.059
年齢	.126 **	.073
健康状態	-.317 ***	-.337 ***
都市(=2)/非都市(=1)	.086 *	.059
Adj-R ²	.171 **	.125 **

欧米における先行研究では、ペットとの絆（関係性）が強いほど幸福感が高いとの結果が一貫して得られてきた。これに対し本研究の結果は、それらの研究では基本的愛着と呼びうる健康的な関係性のみが取り上げられ、逆に種々の問題を引き起こしかねないペットとの依存的な関係性の存在が見過ごされてきたことを示唆している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計1件）

- ① 金児 恵 コンパニオンアニマルと飼主の関係性に関する日米比較 日本社会心理学会第51回大会（2010年9月17-18日）．広島大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金児 恵 (KANEKO MEGUMI)
北海道武蔵女子短期大学・教養学科・専任講師
研究者番号：30422348

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし